HAL
open science

# Nichi-ryū sogo no bunki nendai ( ) [The date of separation of the proto-Japonic language]

Thomas Pellard

## To cite this version:

Thomas Pellard. Nichi-ryū sogo no bunki nendai ( ) [The date of separation of the proto-Japonic language]. Takubo, Yukinori; Whitman, John; Hirako, Tatsuya. Ryūkyū shogo to Kodai Nihongo: Nichiryū sogo no saiken ni mukete ( ) [Ryukyuan and premodern Japanese: Toward the reconstruction of proto-Japanese-Ryukyuan], Kuroshio, pp.99-124, 2016, 9784874246924. hal-02507426

**HAL Id: hal-02507426**

**https://hal.science/hal-02507426**

Submitted on 13 Mar 2020

**HAL** is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

Pellard, Thomas. 2016.「日琉祖語の分岐年代」田窪行則・ホイットマン ジョン・平子達也（編）『琉球諸語と古代日本語：日琉祖語の再建に向けて』99–124. 東京：くろしお出版.

# 日琉祖語の分岐年代

Thomas Pellard

## 1 はじめに

本土日本語と琉球列島の言語が系統関係にあることは疑いの余地もないが、その関係の詳細に関しては多くの問題が残されている。本稿では日本列島の言語史への一貢献として、日琉語族の歴史的な発展を考察し、考古学・人類学の見解を参照しながら日琉祖語の分岐年代と琉球列島への伝播年代の推定を行う。

### 1.1 日琉語族について

日本語の方言と見做されてきた琉球列島や八丈島のことばが消滅の危機に瀕していることが近年認識されはじめたと同時に、それらが日本語の単なる方言ではなく個別の言語と見做した方が妥当であると考えられはじめた。このような流れに伴い、本土日本語の他に琉球諸語や八丈語をも含む多様な「日琉語族」[*1]が想定されるようになってきた（図1）。

日琉語族は（本土）日本語と琉球諸語という 2 つの語派からなることが明らかにされてきたが (Pellard 2009; 2015)、八丈島の言語の系統的位置は未だに不明で、本稿では扱わないことにする[*2]。琉球諸語はさらに北琉球語派（奄美・沖縄）と南琉球語派（宮古・八重山・与那国）に下位分類できる（図2）[*3]。

---

[*1] 従って厳密に日本語が系統的に孤立した言語であるとは言えない。

[*2] 平子・Pellard (2013)を参照。

[*3] この分類は共通の改新のみによる系統的な分類で、表面的な類似に基づく上村 (1997)やかりまた (1999)の分類とは性質が異なる。多くの方言区画論でも同じ分類がなされてきたが、その根拠は不明で詳しく論じられたことは今まであまりなかった。詳細についてはPellard (2009; 2015) を参照。

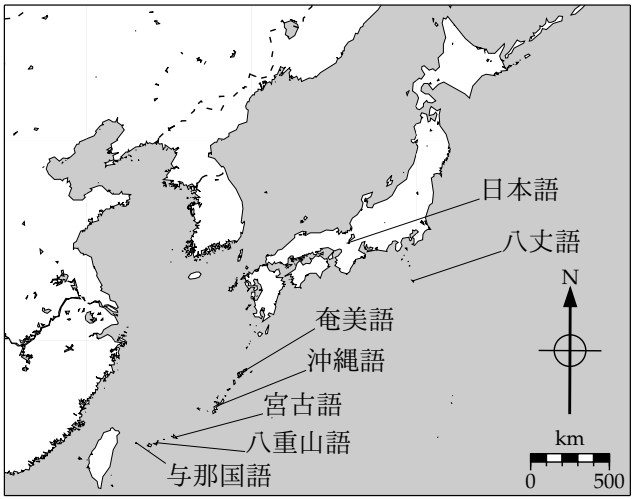


図1　日琉語族

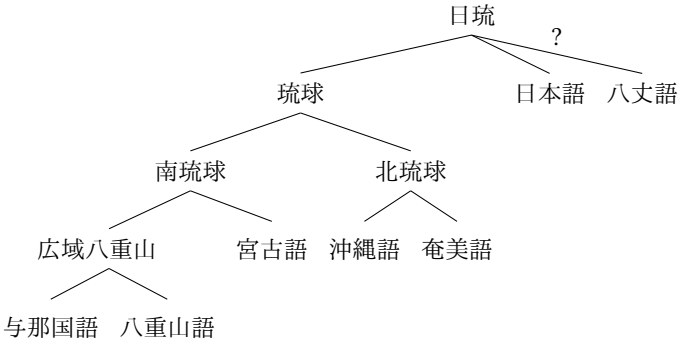


図2　日琉語族の系統図

## 1.2 日琉祖語の分岐年代の問題

日本語と琉球諸語の分岐年代に関しては大きく分けて「奈良時代以前」(服部 1959; 大城 1972; Thorpe 1983; 中本 1990; 上村 1997; Serafim 2003; Lee & Hasegawa 2011 等) と「奈良時代以降」(柳田 1993; Unger 2009; 高梨 他 2009 等) という 2 つの仮説が存在する。本土日本語の歴史は文献資料によって 7・8 世紀まで遡ることが可能であるが、琉球諸語の最古の資料は 15 世紀になってから初めて出現する。一方、奈良時代には日琉語族がすでに少なくとも東北地方から九州地方まで広く分布していたことが『万葉集』の東歌や防人歌などによって明らかとなっている[*4]。しかし、現在の日琉諸語の分布がその時代乃至それ以前の伝播によるものなのか、それとも後代の二次的な伝播と言語（方言）置換によるものなのかは問題である。

琉球諸語の資料を日本語の文献史と照らし合わせると、琉球諸語のなかに中古・中世日本語に近似している特徴と上代日本語乃至それ以前の状態を反映する特徴が混在していることが分かる。一見矛盾しているように見えるこの状態こそ琉球諸語の先史を明らかにする鍵となる。

## 1.3 言語の年代推定法

言語の分岐年代を推定するにあたって「言語年代学」(glottochronology) という方法がよく使用されてきた。言語年代学とは 2 つの姉妹語の間に見られる基礎語彙の共有率からその分岐年代を推定する方法である。言語の変化の速度が一定で普遍的であるという仮説が言語年代学の根本にあるが、それに対する批判が多く出されてきた (Bergsland & Vogt 1962; Nettle 1999; Blust 2000 等)。さらに変化速度と年代の逆算数式がいくつも提案されており、研究者によって年代の推定が大きく異なる場合もある。例えば日琉語族に関しては服部 (1959: 80–83) では紀元後 500 年ごろ、Unger (2009: 100) では 996 年というように大きく異なる分岐年代が提唱されてきた。

また、言語年代学とは異なる、変化の速度を一定としない、より強固な統計方法による試みが最近見られるようになった。印欧祖語の年代推定を試み

[*4] 奈良時代の九州の言語状況は明らかではないが、少なくとも九州在住の防人が日本語を話していたことが分かっている。

たGray & Atkinson (2003)の方法にならって、日琉諸語の分岐年代を紀元前 3 世紀と推定したLee & Hasegawa (2011)が最近注目を浴びた。しかしデータと方法に問題があり[*5]、有望な方法かつ有意な試みだと認めることはできても、まだ実験の段階にあると見たほうがよい。

本稿では日本語の文献資料と現代琉球諸語の比較という、より単純で信頼性の高い方法を使用することにする。ある時代の日本語に起こった音韻統合のような変化が琉球諸語に起こっていない場合、分岐がそれ以前に起こったことを意味する。しかし逆に日本語と琉球諸語に同じ変化が見られる場合、分岐がそれ以降に起こったとは限らない。つまり、分岐後、琉球諸語と日本語に並行的に同じ変化が起こった可能性もある。特に音韻統合や単純な音価の変化は並行的に生じる可能性が高い。

以下で明らかになるように、言語分岐の時代と現在の分布地域への伝播時代が必ずしも一致するとは限らず、両問題は別々に考える必要がある。特に後者に関しては考古学や人類学のような関連学問の研究成果も考慮に入れて考察を進めることが重要である。

## 2 琉球諸語の新しい側面

上代日本語と共通する琉球諸語の古い特徴が従来よく指摘されてきたが、中古・中世日本語との共通点も少なくなく、そういう新しい側面の史的な位置づけが不可欠である。鳥越 (1968: 1–2) や阿部 (2009)のように 16 世紀の『おもろさうし』における語彙や文法事象の検討から日琉祖語の分岐が中古・中世あたりとする考え方もあるが、『おもろさうし』が日本語の影響を強くうけていることを忘れてはならない。特に文法に関してはむしろ現代琉球諸語との比較が必要であるが、現代琉球諸語の文法がまだ充分に研究されておらず、今後の研究成果を待たざるを得ない。確かに古代日本語特有の文法形式の多くは琉球諸語でそれに対応するものが見出されていないが、証拠の不在は不在の証拠ではない。日本語の文法が数世紀の間に大きく変化してきたのと同様に琉球諸語もその文法体系を大きく改新したと思われる。

[*5] 特に「島」という環境にともなう進化速度の変動を考慮に入れていないのが問題と思われる。Pellard (2013a)を参照。

## 2.1 音韻変化

中古期以降の日本語に起こった音韻変化が琉球諸語にも見られることは興味深い。例えば、いわゆる語中のハ行転呼 (*-p- > -w-) と同じ変化が琉球諸語全体で起こっており（表1)、琉球祖語の段階ですでに完了していたと考えられる。ハ行転呼は 10 世紀ごろに日本語に生じた変化なのでその後に琉球祖語が分岐したとも考えられそうだが、この変化は比較的自然な弱化現象で、琉球祖語に並行的に起こった可能性が充分ある。また、日本語との接触によって生じた可能性も考えられる[*6*7]。

表1　語中の *p

| | 前 | 上 | 川・井戸 |
|---|---|---|---|
| 上代語 | マヘ乙 | ウヘ乙 | カハ |
| 中世語 | マエ | ウエ | カワ |
| 岡前 | mɘː | ʔwɨː | koː |
| 首里 | meː | ʔwiː | kaː |
| 大神 | mai | ui | kaː |
| 石垣 | mai | ui | kaː |
| 与那国 | mai | ui | kʰaː |

## 2.2 文法

本土日本語では成立が遅いとされている文法形式が琉球諸語に見られ、例えば「痛し」の文法化に由来する願望の「〜タシ」(ローレンス 2011)、与え手上位者主語の「タマハル（給わる)」(荻野 2011)、推論の「ハズ」、様態の「サウナ」[*8]等は中古期末乃至中世に成立したと思われる。これらに規則的に対応す

[*6] さらに語中の w が特殊な環境以外消える傾向が琉球諸語と本土日本語両方に見られる。

[*7] 表中に出てくる「岡前」「首里」「大神」「石垣」「与那国」は琉球の地名であり、ここではその土地で話されている方言を指す。以下の表も同様。それぞれの位置関係については稿末の附録を参照のこと。

[*8] 漢語の「相」に由来する。

る形式が琉球諸語全体に見られることから（表2）、比較的遅い時期に借用されたとは考えにくく、琉球祖語乃至それ以前の段階に遡ると考えた方が妥当である。ただし、その一部が通言語的な文法化経路を経た並行的な変化の結果である可能性もある。さらに、文献における初出例の時期が必ずしもその形式の成立時期と同じではなく、使用が広まったしばらく後に文学作品に取り入れられるようになった可能性も考えなければならない。

表2　琉球諸語の新しい形式

| | 願望 | 下さる | 推量 | 様態 |
|---|---|---|---|---|
| 中世語 | ～タシ | タマハル | ハズ | サウナ |
| 岡前 | | | hadzɪ | |
| 首里 | | tabo:juŋ | hadzi | |
| 大神 | -ta-kam | | pakɯ | sauna |
| 石垣 | -ta-sa:ŋ | tabo:ɾuŋ | hadzɨ | so:nu |
| 与那国 | -ta- | tʰabaɾuŋ | hadi | |

## 2.3 漢語

琉球諸語には現代における共通日本語の普及によって新しく入ってきた漢語とは別に、その音形からみて古い時代に借用されたであろうと思われる漢語も見られる。これは琉球諸語の歴史を再建するにあたって重要であるが、この問題は今まであまり取り上げられてこなかった。

漢語は沖縄語の首里方言等に特に多いが、琉球王国時代（15～19 世紀）に借用されたと推定できる (服部 1978–1979)。一方、南琉球には琉球祖語に遡ると思われる漢語も存在するが、その音形は中世日本語以前の姿をとどめている。例えば中国語中古音[*9]の江韻 (-aɨwŋ)・清韻 (-iajŋ)・陽韻 (-ɨaŋ) の漢語は古代日本語では (-j)au という形で取り入れられ、中世になると開音の (j)ɔ: に変化するが、琉球諸語のなかに (j)au が対応する方言もある（表3）。つまり、漢語は日

[*9] 中古音の再建形はPulleyblank (1991)による。

本語に数多く借用され始めた 8・9 世紀と au が ɔː に変化する 13〜15 世紀の間に琉球祖語に入ったことになる。

表3　琉球漢語

| | 棒 | 正月 | 上手 |
|---|---|---|---|
| 中古音 | baɨwŋʰ | tɕiajŋ ŋuat | dʑɨaŋ ɕuwʼ |
| 中古語 | バウ | シャウグヮツ | ジャウズ |
| 中世語 | bɔː | ɕɔːgwat | ʑɔːzu |
| 諸鈍 | bo1ː | ɕoːgwad-dɨk | dʑot |
| 首里 | boː | ɕoːgwatsi | dʑoːdʑi |
| 大神 | pau | saukaks | taukɯ |
| 石垣 | boː | ɕoŋgwadzɨ | dʑoːdzɨ |
| 与那国 | buː | suŋati | dudi |
| 琉祖 | *bau | *sjaugwatu | *zjauzu |

# 3　琉球諸語に残存する古代日本語の特徴

中古・中世日本語と共通している新しい側面がある一方、中古期前半乃至上代日本語との共通点も多い。特に琉球諸語には中古・中世日本語に起こった音韻統合の多くが起こっておらず、上代日本語特有の語形や代名詞が見られる。

## 3.1　語頭のワ行音

日本語においてはア行のイ・エ・オとワ行のヰ・ヱ・ヲの対立が 11〜12 世紀に消滅してしまったが、表4・5・6が示すように、現代琉球諸語では、音価が変化したものの、いまだに区別されている。

表4　ア行のイとワ行のヰ

| | 入れる | 居る |
|---|---|---|
| 上代 | イル | ヰル |
| 中古 | イル | イル |
| 岡前 | ʔi:jui | ji(:)jui |
| 首里 | ʔiɾijuŋ | jijuŋ |
| 大神 | ɯɾi | pɯ: |
| 石垣 | iɾiɾuŋ | bᶻɨɾuŋ |
| 与那国 | iɾiɾuŋ | bi- |

表5　ア行のエとワ行のヱ

| | 選ぶ | 酔う |
|---|---|---|
| 上代 | エラブ | ヱフ |
| 中古 | エラブ | エフ > ヨフ |
| 諸鈍 | ʔiɾabjum | ji:- |
| 首里 | ʔiɾabuŋ | wi:juŋ |
| 大神 | iɾapɯ | pi: |
| 石垣 | iɾabuŋ | bi:ŋ |
| 与那国 | iɾabuŋ | biɾuŋ |

表6　ア行のオとワ行のヲ

| | 降りる | 折る |
|---|---|---|
| 上代 | オル | ヲル |
| 中古 | オル | オル |
| 岡前 | ʔuɾijui | wujui |
| 首里 | ʔuɾijuŋ | wu:juŋ |
| 大神 | uɾi | puɯ |
| 石垣 | uɾiɾuŋ | buɾuŋ |
| 与那国 | uɾiɾuŋ | buɾuŋ |

## 3.2　ア行の「エ」とヤ行の「エ」

古代日本語ではア行の「エ」とヤ行の「エ」（イェ）が 10 世紀の半ばごろまで区別されていた。その区別は現代の本土のどの方言にも残存していないようだが、琉球諸語の北琉球派では日本語のエに (ʔ)i が対応するのに対し、イェには ji・wi が対応する（表7）。

表7　ア行のエとヤ行のエ（イェ）

| | 海老 | 柄 |
|---|---|---|
| 古代 | エビ | イェ |
| 中世 | エビ | エ |
| 諸鈍 | ʔip | ji: |
| 岡前 | ʔibi: | ji: |
| 首里 | ʔibi | wi: |

## 3.3　再び p 音について

日本語のハ行子音が元来 *p であり琉球諸語の多くでは p が対応していることから、琉球諸語の p 音が祖語の *p をそのまま反映しており、一部の方言に

見られる ɸ・f・h は二次的な派生であると従来考えられてきた。日本語において *p がいつごろ摩擦音 ɸ に変化したかははっきりしておらず、平安時代や鎌倉・室町時代という諸説がある。

しかし、それに対して「p 音新形説」が柳田 (1993)や中本 (2009) によって提唱された。この説によると、いったん *p が ɸ に弱化した後に一部の琉球諸語において p に逆戻りしたという。しかしこの説は積極的な証拠も示されておらず、説得力を欠いている[*10]。

表8　語頭の *p

| | 歯 | 日 | 屁 | 踊り |
|---|---|---|---|---|
| 日本語 | ハ | ヒ | ヘ | ヲドリ |
| 岡前 | haː | çiː | ɸɨː | wudui |
| 今帰仁 | pʰaː | pʔiː | pʰiː | wuːdui |
| 大神 | paː | psː | piː | putuɯ |
| 石垣 | paː | pˢɨː | piː | buduɾɨ |
| 与那国 | haː | tɕʔiː | çiː | budi |

まず（語頭の）ɸ|f > p[*11]という変化が管見の及ぶ限りでは世界に類例がほとんどないようである (Kümmel 2007 等)。ɸ|f > p の例は常に摩擦音が既存の破裂音と合流するような例であり、琉球諸語の場合とは性質が異なる。したがって ɸ|f > p は起こる可能性の低い変化と言える。南琉球に起こったとされる有声音の *w > b の変化と類似しているとされているが、有声性の点で異なっており、それに伴う空気力学的な特徴も生じうる音声変化も大きく異なる。ɸ > p が不自然な変化であるのに対し、w > b という変化はヒンディ語 (Masica 1991: 202) やオーストロネシア諸語 (Blust 1990: 252) に見られる。さらに、喜界島、奄美大島北部、沖縄北部の諸方言のように p を持っている方言の多くでは *w が破

[*10] 中本 (2009)の p 音新形説に矛盾と問題点が多いことを批判するかりまた (2009)も参照。

[*11] 複数の形が可能な場合は、それらを「|」という選択演算子の記号で区切って表す。つまり、「x|y」は「x または y」という意味を表す。また、角括弧 ([...]) は必要に応じてグループ分けを表し、演算子の適用範囲を制限する。つまり「wx|yz」は「wx または yz」という意味を表すのに対し、「w[x|y]z」は「w, そして x または y, そして z」、つまり「wxz または wyz」という意味を表す。

裂音の b に変化しておらず、一方、与那国語では *w が b に変化していながらも、破裂音の p ではなく摩擦音の h が現れていることから p の存在と w の破裂音化は関係のない現象であり、両者を同様の「強化」現象とみなすことはできないことが分かる。北琉球諸語において強い呼気流が喉頭の緊張によって制御された結果 *ϕ が p に強音化したという中本の仮説では上のことが説明できない。その仮説では、*e と *o の前では喉頭化子音が生じないのでそこに p は現れないはずであるが、実は p をもっている方言では p が母音と関係なく現れる（表8の今帰仁方言の例）ので、喉頭化説は反証される。

また、ϕ > p という極めて不自然な変化が多くの方言において独立的に起こったと想定しなければならないが、その確率は皆無に近い。一方、p > ϕ|f は自然な変化で、何回も並行的に生じることは十分可能である。

中本 (2009; 2011) が北琉球や南琉球の一部の方言で起こったと推定する *k[u|o][r|w] > *kw > *ϕ > p|ϕ|f の変化はむしろ *k[u|o][r|w] > *kw > *p > p|ϕ|f という過程をたどったと考えられる。印欧祖語またはラテン語の *kw がギリシャ語、ウェールズ語、サベリア語、ルーマニア語等では p に変化しているという類例もあるが (Fortson 2009)、どれも摩擦音の状態を経ていない。中本 (2009: 9) も指摘するように、鹿児島県の枕崎方言等に同じ変化が起こっているが、*ϕ という中間段階を経た形跡はない。

## 3.4 語彙

イメ$_{乙}$ > ユメ（夢）[*12]やウモ > イモ（芋）[*13]のように、上代から中古期にかけて日本語で不規則的な音韻変化が生じた語彙が存在するが、琉球諸語ではその音韻変化以前の形が残存している（表9）。これは琉球諸語と本土日本語の分岐年代の古さを示唆するものである。

上代日本語の 1 人称代名詞「ア（レ）」は平安時代になると姿を消し、現代の本土方言にも残存していないようである。一方、南琉球諸語にはそれに対応する代名詞が存在する。また、『万葉集』の東歌と防人歌に見られる上代東国

---

[*12] 「妹之　伊目(イメ乙)尓之所見」（妹が夢にし見ゆる、万四・490）。

[*13] 「意吉麿之　家在物者　芋(ウモ)毛乃葉尓有之」（意吉麿が家なるものは芋の葉にあらし、万十六・3826）。

方言特有の 1 人称代名詞「和奴（ワヌ）・和努（ワノ甲）」[*14]に対応する代名詞が琉球諸語に見出される（表10）。

上代日本語の 2 人称代名詞「ナ（レ）」も後の時代に姿を消してしまうが[*15]、北琉球では対応する尊敬の代名詞が広く分布している。一方、南琉球では対応する形式が再帰代名詞・話者指示的代名詞として使われている（表11）。上代日本語の「ナ」も 1 人称と 2 人称両方の用例があり、再帰代名詞に由来するという説が興味深い[*16]。

表9　不規則的な音韻変化

| | 夢 | 芋 |
|---|---|---|
| 上代 | イメ乙 | ウモ |
| 中古 | ユメ | イモ |
| 諸鈍 | ʔimɨ | ʔumu |
| 今帰仁 | ʔimiː | ʔumuː |
| 大神 | imi | mː |
| 石垣 | imi | uŋ |
| 与那国 | imi | unti |

表10　一人称代名詞

| 方言 | ア系 | ワ系 |
|---|---|---|
| 上代 | ア | ワ |
| 中古 | | ワ（レ） |
| 岡前 | | waŋ |
| 首里 | | waŋ |
| 大神 | anu | |
| 与那国 | anu | banu |

表11　*na の反映形

| 方言 | 2 人称 | 再帰 |
|---|---|---|
| 上代 | ナ（レ） | |
| 中古 | — | |
| 諸鈍 | nam | |
| 今帰仁 | naː | |
| 大神 | | nara |
| 石垣 | | nara |

## 4　上代日本語にも残存しない日琉祖語の特徴

このように日琉祖語の分岐が遅くても上代に起こったことが明らかになってきたが、上代以前に起こった可能性も検討する必要がある。詳細に調べると、日琉祖語にあったが上代には形跡しかない、またはまったく見られない古い言語特徴が琉球諸語に存在することが分かる。

---

*14 「宇倍兒奈波　和奴（ワヌ）　尓故布奈毛」（諸児なは吾に恋ふなも、万十四・3476）、「於保伎　美乃　美許等加志古美　伊弖久礼婆　和努（ワノ甲）等里都伎弖　伊比之古奈波毛」（大君の命かしこみ出で来れば吾の取り著きて言ひし子なはも、万二十・4358）。

*15 「ナムチ・ナンヂ」という同源の代名詞は遅くまで残存する。

*16 「奈（ナ）何名能良佐祢」（汝が名告らさね、万五・800）、「名（ナ）兄乃君」（汝背の君、万十六・3885）。Whitman (1999)も参照。

## 4.1 乙類イの 2 つの由来

日本語史でもっとも注目されてきた問題の一つである上代特殊仮名遣いでは 2 種類（甲類・乙類）のイ・エ・オ段音節が書き分けられ、音韻対立を表していたと考えられる。古い特徴を多く残している琉球諸語にその区別を見つけ出そうとする研究は多く見られたが、はっきりした対応は見出されないという見解が一般的のようである (奥村 1990 等)。しかし音韻変化とは規則的に起こるもので、対応が複雑であることには理由があるはずであるが、上代語を日琉祖語と同一視するかぎりこの問題は解決できない。

実はこの問題はすでに有坂 (1934b)や服部 (1932)の研究によって概ね解明されているが、意外とあまり注目されなかった。上代日本語の同じ乙類のイ列音でもさらにツキ$_{乙}$（月）〜ツクヨ$_{甲}$（月夜）のようにウ列音と交替するものとキ$_{乙}$（木）〜コ$_{乙}$ ノ$_{乙}$ ハ（木葉）のように（乙類の）オ列音と交替するものの 2 種類に分けられる。この 2 通りの交替はより古い状態の名残りであり、元は *ui 対 *əi のような 2 つの異なる音であったと考えられる (松本 1975; 大野 1977; 服部 1978–1979; Martin 1987)。この点について、琉球諸語では両者が区別されており（表12）、上代特殊仮名遣いと一対一の単純な対応関係はないものの、奈良時代以前の区別が現代の琉球諸語に残存していると言える。

表12　乙類イの二つの由来

| | 月 | 木 |
|---|---|---|
| 日琉 | *tukui | *kəi |
| 上代 | ツキ$_{乙}$〜ツク | キ$_{乙}$〜コ$_{乙}$ |
| 諸鈍 | tɨkʲi | kʰɨː |
| 今帰仁 | ɕitɕiː | kʰiː |
| 大神 | ksks | kiː |
| 石垣 | tsɨkˢɨ | kiː |
| 与那国 | tʲiː | kʰiː |
| 琉祖 | *tuki | *ke |

## 4.2 オの甲乙

琉球諸語にオ列音の甲乙に対応する区別はないようであるが、上記の「木」の例で見たように乙類のオ列音 (< *ə) と交替する乙類のイ列音が琉球祖語の *e に対応しているのに対し、甲乙の別が分からないオ列音と交替する乙類のイ列音の一部が琉球祖語の *e ではなく *i に対応している。そのオ列音は乙類ではなく甲類相当 (< *o) であったと考える (Pellard 2013b)。

例えば「火」はヒ$_{乙}$〜ホノ$_{乙}$ホ（炎）のような交替を示しているが、ホには甲乙の書き分けがない。仮にこのホが乙類相当のものであったとすれば、琉球祖語では *pe が期待される（「木」*ke と比較）。しかし、実際は琉球祖語では *pi という語形が再建される（表13）。このことから、日琉祖語では *pəi ではなく *poi だったと考えられる。

同じように「青〜藍」の交替対にも甲乙の書き分けがないが、もし日琉祖語形が *awəi なら、琉球祖語形は *awe であるはずである。しかし琉球諸語の対応から *awe ではなく *awi が琉球祖語形として再建されるので（表14）、日琉祖語形は *awoi と再建されることになる。「ア列と乙類のオとは、同一結合単位内に共存することが少ない」という有坂 (1934a)の第 3 の法則から見ても「青」のヲを甲類相当 (*awo) と考えた方が妥当である。

表13　オの甲乙：「火」

| | 火 | 篦 |
|---|---|---|
| 上代 | ヒ$_{乙}$〜ホ | ヘ$_{甲}$ ラ |
| 岡前 | çi- | ɸɨːra |
| 今帰仁 | pʔiː | pʰɪraː |
| 石垣 | pˢɨː | pɪra |
| 与那国 | tɕʔiː | çɪra |
| 琉祖 | *pi | *pera |

表14　オの甲乙：「青・藍」

| | 藍 | 前 |
|---|---|---|
| 上代 | アヲ〜アヰ | マヘ$_{甲}$ |
| 諸鈍 | ʔjeː | məː |
| 岡前 | ʔai | məː |
| 平良 | aᶻɨ | mai |
| 琉祖 | *ai | *mae |

## 4.3 *e と *o の再建

日琉祖語の母音体系は従来 *a・*i・*u・*ə（> オ乙）からなる 4 母音体系と考えられてきた (松本 1975; 大野 1977; Martin 1987)。通説では、上代語に現れるそれ以外の母音のすべてがイ乙 < *ui・*əi、エ甲 < *ia、*iə・エ乙 < *ai・*əi、オ甲 < *ua・*au・*uə のように二重母音に由来すると考えられてきた。しかし、この説は比較方法による日琉祖語の再建ではなく、上代日本語に見られる母音の交替と融合のパタンのみに基づいている内的再建である。

表15　日琉祖語の *i 対 *e と *u 対 *o の対応

| 上代 | 日琉 | 北琉球 | 南琉球 |
|---|---|---|---|
| イ甲 | *i | (ʔj)i, ∅ | (s/z)ɨ, ɯ, s, i, ∅ |
| イ甲（エ甲） | *e | (h)ɨ, ɪ, i | i |
| ウ | *u | (ʔ)u, ɨ, ɪ, i,∅ | u, ɨ, ɯ, i, ∅ |
| ウ（オ甲） | *o | (h)u, o | u |

表16　日琉祖語の *i 対 *e と *u 対 *o

| | 昼（間） | 蒜 | 馬・午 | 海 |
|---|---|---|---|---|
| 日琉 | *piru | *peru | *uma | *omi |
| 上代 | ヒ甲 ル | ヒ甲 ル | ウマ | ウミ甲 |
| 岡前 | çɪɾuː | ɸɨːɾu | ʔmaː | ʔuŋ |
| 今帰仁 | pʔɪɾuː | pʰɪɾuː | ʔmaː | ʔumi |
| 大神 | psː-ma | piɯ | mma | im |
| 石垣 | pˢɨːɾɨ | piŋ | mma | iŋ |
| 与那国 | tsʔuː | çɪɾu | mma | unnaga |

その後は、琉球諸語[*17]の資料を考慮に入れた 6 母音説 (*a・*i・*u・*ə・*e・*o) が提唱された (服部 1978–1979; Thorpe 1983; Miyake 2003; Serafim 2008; Pellard 2008; 2009; 2013b)。6 母音説の特徴は 4 母音説にはなかった *e と *o の再建で

[*17] 上代東国方言や八丈語の資料も *e と *o の再建を裏付けている (Pellard 2008)。

ある。その根拠は琉球諸語にあり、上代語のイ甲とウが琉球諸語では 2 通りの対応を示している（表15・16）。

## 4.4 アクセント

日本語のアクセント史は古文献におけるアクセント表記（声点）と現代本土諸方言の比較によって行なわれてきた。その結果、例えば日本祖語の 2 拍名詞に 5 つの「アクセント類」が存在したと考えられている。

一方、琉球諸語では現代諸方言の比較によって 2 拍名詞に 3 つの類 (A・B・C) が再建される (服部 1958; 1978–1979; Matsumori 1998)。大分方言等の外輪式アクセントと同じく琉球諸語では類別語彙の 2 拍名詞が {1,2} (A), {3} (B), {4,5} (C) のように合流しているという記述が最近でも見られる (金田一 1960; 平山 他 1966; 1967; 上村 1997; 崎村 2006)。しかし、服部 (1958)がいち早く指摘し、その後繰り返して述べてきたように (服部 1978–1979)、{1,2}, {3}, {4,5} の外輪式アクセントを示す方言は琉球列島に 1 つもない。服部がすでに述べており、最近の研究 (Matsumori 1998; 2001; 2009; 松森 2010; 小川 2012; 五十嵐 他 2012) がさらに明らかにしたように、琉球諸語において観察されるのは {1,2} (A), {3,4,5} (B), {(3,)4,5}(C) のような対応である。つまり、日本語の 3・4・5 類に B と C の両方が対応している（図3・表17）[*18]。

上の 3・4・5 類の分裂条件が見つかっていない以上、日琉祖語により多くのアクセント類をたてるしかなく、琉球諸語が日本語において消滅してしまったアクセントの区別を保持していると考えざるをえない。服部 (1978–1979)の長母音説のように、琉球諸語における B と C の区別はアクセント以外の特徴の名残りである可能性もあるが、それが日琉祖語にあって本土日本語では完全に消滅した特徴であることは変わらない。ちなみに、3 拍名詞にも同様の対応パタンが見られ (Matsumori 2000)、2 拍名詞の対応も偶然によるものではないということを裏付ける。

[*18] 実際、C に対応する 3 類名詞が少数である。

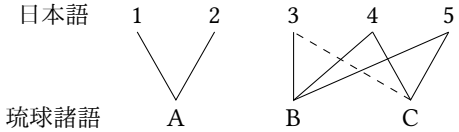


図3　2 拍名詞アクセント類の対応

表17　2 拍名詞アクセント類の対応例

| | 影 | | | 雨 |
|---|---|---|---|---|
| 中古 | カゲ | 平東 | = アメ | 平東 |
| 東京 | káŋè | HL | = ámè | HL |
| 京都 | kàgê | LF | = àmê | LF |
| 鹿児島 | kàgé | LH | = àmé | LH |
| 岡前 | kà:gɨ́ | L:H | ≠ ʔàmɨ̌: | LR: |
| 今帰仁 | hágì | HL | ≠ ʔàmǐ: | LR |
| 首里 | ká:gí | H:H | ≠ ʔámí | HH |
| 西原 | kágí=màì | HH-LL | ≠ ámí=máí | HH-HH |
| 与那国 | kʰàŋî | LF | ≠ àmì | LL |

# 5　関連学問との比較

## 5.1　言語学の観点：まとめ

以上のような考察から現代の琉球諸語が古い特徴を数多く保持していることが分かった。琉球諸語の最古の文献が現れる 15 世紀より前に琉球諸語が本土日本語と分かれたのは自明であるが、1.2 節で見た古形や音韻対立の保持からその分岐が中古期初めの 9 世紀を下らないことが分かる。さらに、上代語の内的再建からしかその存在をうかがい知ることができない、あるいは上代語に残影さえない音韻対立を考慮にいれると、日琉祖語の分岐時代が 8 世紀以前、つまり日本の有史以前であるという結論に至る。

一方、琉球諸語と中古及び中世日本語との共通点も少なくない。その一部は偶然の並行的な変化の結果であると説明できても、琉球諸語における漢語の存

在などは別の説明が必要である。日本語との接触（借用）の結果と見做せば、この矛盾を解決できると思われる。ただし、漢語や新しい文法形式が南琉球まで広まっており、規則的に対応していることが重要である。南琉球と本土の交流が少なく直接借用の機会がほとんどなかったとして、本土との交流が多かった首里方言を通した間接借用と考えると、南琉球諸語との音韻対応は多少乱れるはずである。

結論としては、これらの琉球祖語の形は再建可能なので琉球列島に伝播する以前の段階に本土日本語から琉球祖語によって借用されたと考えられる。つまり、琉球祖語と日本祖語が分岐した後にかなり遅い時代まで隣り合って接触してきたと考えれば、上の矛盾も問題なく解決される。その借用語は 9〜13・15 世紀の間に取り入れられ、接触は少なくともその時代まで続いたと思われる。

## 5.2 考古学と人類学の観点

日本列島最古（約 3 万 2000 年前）の人骨が沖縄島の山下町第 1 洞穴遺跡で発見されており、後期更新世後半（約 4 万〜1 万年前）の琉球列島には人類がすでに住みついていたことが知られているが、その時代の住民は旧石器時代までは生き延びず、現代琉球列島の住民とは直接つながりはないと思われている (安里・土肥 1999; 高宮 2005: 95-100)。

南琉球は本土縄文文化も後の弥生文化も伝わっておらず、11・12 世紀まで本土とも北琉球とも交流がなく、狩猟採集を中心としたまったく異なる文化圏をなしていた[*19]。したがって日琉系の言語が南琉球に入ったのはそれ以降であろうということは直ちに推測できる。北琉球においても、日琉祖語を日本列島にもたらした弥生文化[*20]も後の古墳文化も見られないが、本土の縄文時代と平行した貝塚時代（前 6400 年〜紀元後 11 世紀）には縄文文化に似た狩猟採集文化

[*19] 4500〜3900 年前、台湾から来たオーストロネシア系の人々が南琉球に住んでいたことが最近の研究で明らかになっているが、それは一時的で永く続くことはなかった (Summerhayes & Anderson 2009; Hudson 2012)。オーストロネシア人が南琉球から姿を消し、数世紀の空白の後に無土器・無農耕の文化が現れた (安里・土肥 1999; 安里 他 2004; Hudson 2012)。

[*20] 縄文時代に日琉祖語がすでに日本に渡っていたとする説もある (小泉 1998; 松本 2007)。筆者はその可能性がほとんどないと考えているが、詳細な論証は別稿に譲る。琉球列島から日琉祖語と稲作文化が北上して本土に渡ったとする「海上の道」説の問題点についてはPellard (2015) を参照。

が存在していた (安里・土肥 1999)。

北琉球の貝塚文化は九州とネットワークを結んでおり、貝を陶器と交易していた (安里・土肥 1999; 安里 他 2004)。しかし本土の弥生・古墳文化と接触していたにも関わらず、貝塚人が農耕を取り入れることはなかった。琉球列島で農耕が行なわれはじめたのは 10・11 世紀ごろで (高宮 2005)、稲を中心としながら麦と粟をも含めるという、当時の本土と似た農耕が始まった (木下 2003)。

琉球列島における狩猟採集社会から農耕社会への移行が急速に起こり、人口も急激に増加した。狩猟採集の先住民が農耕を取り入れたと考えるだけではその急な変動を説明できないため、移民が行なわれたと考えざるを得ない (安里 他 2004; 高宮 2005)。10〜12 世紀のこの「原グスク時代」という短い期間において農業・冶金術・陶器・交易に基づいた階級社会が築かれ、後に琉球王国へ発達していった。その時期に本土との交易が拡大した他に、初めて南琉球が同じ文化圏に取り入れられるようになった。

一般的に、本土（九州）からの移民がグスク文化成立の引き金となったと考えられている (安里・土肥 1999; 木下 2003; 安里 他 2004; 高宮 2005)。琉球祖語の語彙の中に耕作（稲・籾・麦・粟・黍・芋・畑・田）や家畜（牛・馬）関連の語彙が再建され (Pellard 2015)、日本語とも規則的に対応することからグスク時代以降の借用ではないといえる。つまり琉球祖語の話し手が、貝塚人とは異なり、元から農業の技術を持っており、グスク文化を琉球列島にもたらしてきた人々だったと見ることができる。

人骨や DNA の研究成果によって現代琉球の住民が系統的にオーストロネシア人とは直接つながっておらず、本土日本人に系統的にもっとも近く、縄文人とはより離れていることが分かっている (安里・土肥 1999; Tajima et al. 2004; Li et al. 2006; Shinoda & Doi 2008; Matsukusa et al. 2010)。また、現代琉球列島の住民の直接の祖先は貝塚人ではなくグスク時代人であると考えられている。先史時代において交流のない独自の文化圏をなし、異なる民族が住んでいた南琉球と北琉球の現代住民が同じ系統グループに属していることは移民によって先住民が置き換えられたことを示唆する。この移民によって琉球祖語も伝播したのであろう。

高宮 (2005)が指摘するように、面積の狭い島では食料が少なく狩猟採集社会を営むのが困難であるため、農耕の始まる以前には琉球列島の住民は少なく、無人島も多かったと思われる。実際沖縄の貝塚人が食料危機に瀕したこともあ

ったが、それでも農耕に移行したことがなかったのは農耕の技術をもっていなかったためだと思われる。人口も技術も貝塚人のそれを遥かに上回っていたグスク文化の担い手が簡単に先住民を置き換えたことが想像できる。

## 6 まとめ: 総合的なシナリオへ

以上で見たように日琉祖語の分岐年代の問題は琉球列島への移民の問題と密接に関係しているが、両者は分けて考えなければならない。

本稿で示したとおり、日琉祖語の分岐を奈良時代以降と想定すると説明できない特徴を琉球諸語が数多く保持しており、中古・中世分岐説は成り立たない。しかしそれと同時に、琉球祖語が中古・中世日本語と接触していた証拠もある。これは移民の時期の問題と関係しており、上代において大和朝廷に反抗していた隼人の一部が圧力や征伐を逃れるために琉球へ逃亡したという説 (上村 1977; 1997; Serafim 1994) も西暦紀元前後に琉球祖語が琉球列島に入ったという説 (上村 2010) も成り立たない。

琉球祖語がいつ琉球列島に入ってきたかという問題に関しては考古学や人類学の側から参考になる研究成果があり、数千年前から琉球列島に住み着いていた先住民が琉球祖語を取り入れたという説も、古い時代に本土からの移民によって琉球祖語が伝播した説も完全に否定される。

まず、南琉球はグスク時代まで孤立した文化圏をなしており、それまで琉球祖語が伝播する機会がなかった。その後、文化と住民の転換があったということから、琉球祖語が先島地方に初めて入ってきたのが 11 世紀あたりで、それは農耕と同時にグスク文化の担い手によってもたらされたとしか説明できない。北琉球では、弥生・古墳時代に行なわれていた交流によって琉球祖語が入ってくる機会があったものの、それを示す資料がなく、文化や人口の大きな変動もなかった。北琉球の貝塚人が持っていなかった農耕文化は琉球祖語の話し手が持っていたと思われるので、琉球祖語の伝播は貝塚時代には行なわれなかったと思われる。逆に、(原）グスク時代は九州からの移民によって狩猟採集社会から農耕社会への急な転向と人口の急激な増加がもたらされた時代で、この時代を琉球祖語の伝播時期と見做したほうが妥当である[*21]。Bellwood & Renfrew

[*21] Serafim (2003)も同じような仮説を発表している。

(2002)等の提唱する「農耕言語同時伝播」モデルともよく合致する。

日琉祖語の分岐が弥生時代に生じたとする言語年代学研究と考古学の成果との矛盾が取り上げられることがしばしばあり (高宮 2005 等)、それを基に言語年代学を批判し分岐年代をグスク時代まで下げるべきだとする考えもある (高梨 他 2009)。しかし、これは分岐の年代と伝播の年代を混同していると思われる。言語年代学には問題が多いためその結果を無視できても、分岐年代を奈良時代以前に設定しない限り説明できない言語事実がたくさん存在する。本稿で提案したように、日琉祖語が分岐したあとに、（先）琉球祖語が琉球列島へすぐには伝播せず、本土にとどまり数世紀にわたって日本語と接触したと考えれば上の矛盾が問題なく解決される。

（先）琉球祖語が日本語と 7・8 世紀以前に分かれた後、9〜11 世紀まで恐らく九州に在地し、日本語と接触し強い影響を受け、その後琉球列島へグスク文化の一要素として移民によって伝播していったという総合的なシナリオを描いてきた。しかし、今後の課題となるべき問題はいくつか残されている。まず、琉球祖語・グスク文化の伝播に関してまだ不明な点が多く存在し、移民の詳細なタイミングやルート及び動機が未だに明らかになっていない。また、肝心の日琉祖語の分岐年代は下限の時期は特定できたが、具体的な年代も上限も分からないままである。絶対年代のわかる文献資料が発見されない限りこの問題は言語学だけでは解決できないかもしれない。

最近のLee & Hasegawa (2011)では紀元前 3 世紀という分岐年代が推定されているが、これは新年代の弥生時代中期に相当しており、この時期に 2 つの語派への分岐を起こしえた社会・文化的な変動は思いつかない。琉球諸語と日本語との言語学的な距離がさほど遠くなく、その系統関係は専門家でなくても分かるほどはっきりしており、両語派の間では共通の基礎語彙が非常に多く見られる[*22]。そう考えると、日琉祖語が紀元後 3 世紀の弥生時代末期または 4〜7 世紀の古墳時代に分岐したと考えた方が妥当であろう。弥生時代末期・古墳時代は日本各地に政治体が成立し、後にヤマト政権が現れる時期であり (Lee & Hasegawa 2011)、日琉祖語分岐の時代として一番相応しいと思われる[*23]。

---

[*22] 大城 (1972)によると、日本語（東京方言）と琉球諸語の間では基礎語彙の約 69〜76% が共有されている。

[*23] 服部 (1959)も同じく日琉祖語の分岐年代を古墳時代とみているが、言語年代学が主な根拠となっており、本稿ではより確実な根拠と精密な考察によってその説を裏付けようとした。

# 調査資料

奄美語の加計呂麻島諸鈍方言は筆者の調査ノート及びMartin (1970)、徳之島岡前方言は筆者の調査ノート、沖縄語の今帰仁方言は仲宗根 (1983)、首里方言は国立国語研究所 (1963)、宮古語の大神方言及び西原方言は筆者の調査ノート、平良方言はNevskij (1922–1928)、八重山語石垣方言は宮城 (2003)、与那国語は筆者の調査ノート及び法政大学沖縄文化研究所 (1987)を参照した。表記は簡略音声表記に統一した。『万葉集』の例は中西 (1978–1985)による。その他に中村他 (1982–1999)、金田・宮腰 (1988)、馬淵 (1971)、Frellesvig (2010)のような概説書や辞書も参照した。

# 付録

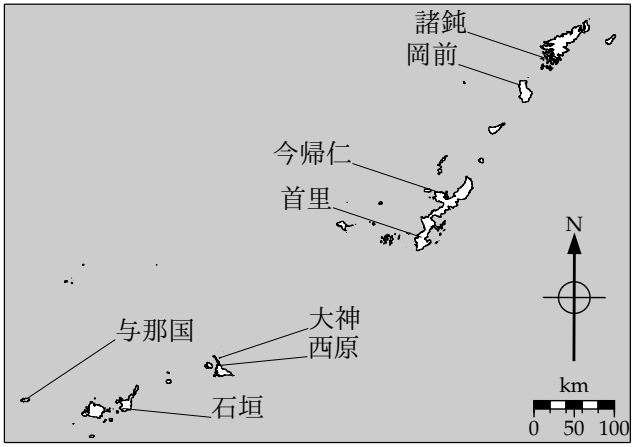


図4　諸方言の所在地

# 参照文献

阿部美菜子. 2009. 「『おもろさうし』の言語年代：オモロ語はどこまで遡れるか」『沖縄文化はどこから来たか：グスク時代という画期』133–190. 東京：森話社.

有坂秀世. 1934a. 「古代日本語における音節結合の法則」『国語と国文学』11(1): 80–92.

有坂秀世. 1934b. 「母音交替の法則について」『音声学協会会報』34: 2.

安里進・土肥直美. 1999. 『沖縄人はどこから来たか：琉球＝沖縄人の期限と成立』那覇：ボーダーインク.

安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭. 2004. 『沖縄県の歴史』東京：山川出版社.

Bellwood, Peter & Renfrew, Colin. 2002. Farmers, foragers, languages, genes: The genesis of agricultural societies. In Bellwood, Peter & Renfrew, Colin (eds.), *Examining the farming/language dispersal hypothesis*, 17–31. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research.

Bergsland, Knut & Vogt, Hans. 1962. On the validity of glottochronology. *Current Anthropology* 3(2): 115–153. https://doi.org/10.1086/200264.

Blust, Robert. 1990. Patterns of change in the Austronesian languages. In Baldi, Philip (ed.), *Linguistic change and reconstruction methodology*, 231–267. Berlin: Mouton de Gruyter. https://doi.org/10.1515/9783110886092.231.

Blust, Robert. 2000. Why lexicostatistics doesn't work: The 'universal constant' hypothesis and the Austronesian languages. In Renfrew, Colin & McMahon, April & Trask, Larry (eds.), *Time depth in historical linguistics*, 311–332. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research.

Fortson, Benjamin W. IV. 2009. *Indo-European language and culture: An introduction*. 2nd edn. Chichester: Wiley-Blackwell.

Frellesvig, Bjarke. 2010. *A history of the Japanese language*. Cambridge: Cambridge University Press. https://doi.org/10.1017/CBO9780511778322.

Gray, Russell D. & Atkinson, Quentin D. 2003. Language-tree divergence times support the Anatolian theory of Indo-European origin. *Nature* 426: 435–439. https://doi.org/10.1038/nature02029.

服部四郎. 1932. 「「琉球語」と「国語」との音韻法則 (1)：琉球語との比較の対象となるべき言語」『方言』2(7): 22–37.

服部四郎. 1958. 「奄美群島の諸方言について：沖縄・先島諸方言との比較」『人類科学』11: 77–99.

服部四郎. 1959. 『日本語の系統』東京：岩波書店.

服部四郎. 1978–1979. 「日本祖語について 1–22」『言語』7(1)–7(3), 7(6)–8(12).

平子達也・Pellard, Thomas. 2013.「八丈語の古さと新しさ」木部暢子（編）『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：八丈方言調査報告書』47–67. 立川：国立国語研究所 http://pj.ninjal.ac.jp/endangered/report/hachijo.html.

平山輝男・大島一郎・中本正智. 1966. 『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院.

平山輝男・大島一郎・中本正智. 1967. 『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院.

法政大学沖縄文化研究所（編）. 1987. 『琉球の方言 11：八重山・与那国島』. http://hdl.handle.net/10114/11991.

Hudson, Mark J. 2012. ‘Austronesian’ and ‘Jōmon’ identities in the Neolithic of the Ryukyu Islands. *Documenta Praehistorica* 39: 257–262. https://doi.org/10.4312/dp.39.17.

五十嵐陽介・田窪行則・林由華・Pellard, Thomas・久保智之. 2012.「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(1): 1–15. https://doi.org/10.24467/onseikenkyu.16.1_134.

金田弘・宮腰賢. 1988. 『新訂国語史要説』東京：大日本書房.

かりまたしげひさ. 1999. 「音声の面からみた琉球諸方言」言語学研究会（編）『ことばの科学』, 第 9 巻. 13–85. 東京：むぎ書房.

かりまたしげひさ. 2009. 「琉球語の ɸ > p の可能性をかんがえる：中本謙「琉球方言のハ行子音 p 音」への問い」『沖縄文化』43(1/105): 1(78)–19(60). https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.7.4_1.

金田一春彦. 1960. 「アクセントから見た琉球語諸方言の系統」『東京外国語大学論集』7: 59–80.

木下尚子. 2003. 「貝交易と国家形成：9 世紀から 13 世紀を対象に」木下尚子（編）『先史琉球の生業と交易：6〜7 世紀の琉球列島における国家形成

過程解明に向けた実証的研究』117–144. (科学研究費補助金研究成果報告書 11410107) 熊本：熊本大学 http://hdl.handle.net/2298/15535.

小泉保. 1998. 『縄文語の発見』東京：青土社.

国立国語研究所（編）1963. 『沖縄語辞典』東京：大蔵省印刷局.

Kümmel, Martin Joachim. 2007. *Konsonantenwandel: Bausteine zu einer Typologie des Lautwandels und ihre Konsequenzen für die vergleichende Rekonstruktion.* Wiesbaden: Reichert.

ローレンス ウエイン. 2011. 「琉球語から見た日本語希求形式＝イタ＝の文法化経路」『日本語の研究』7(4): 30–37.

Lee, Sean & Hasegawa, Toshikazu. 2011. Bayesian phylogenetic analysis supports an agricultural origin of Japonic languages. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences* 278(1725): 3662–3669. https://doi.org/10.1098/rspb.2011.0518.

Li, Shi-Lin & Yamamoto, Toshimichi & Yoshimoto, Takashi & Uchihi, Rieko & Mizutani, Masaki & Kurimoto, Yukihide & Tokunaga, Katsushi & Jin, Feng & Katsumata, Yoshinao & Saitou, Naruya. 2006. Phylogenetic relationship of the populations within and around Japan using 105 short tandem repeat polymorphic loci. *Human Genetics* 118(6): 695–707. https://doi.org/10.1007/s00439-005-0106-9.

馬淵和夫. 1971. 『国語音韻論』東京：笠間書院.

Martin, Samuel E. 1970. Shodon: A dialect of the Northern Ryukyus. *Journal of the American Oriental Society* 90(1): 97–139. https://doi.org/10.2307/598434.

Martin, Samuel E. 1987. *The Japanese language through time.* New Haven: Yale University Press.

Masica, Colin P. 1991. *The Indo-Aryan languages.* Cambridge: Cambridge University Press.

Matsukusa, Hirotaka & Oota, Hiroki & Haneji, Kuniaki & Toma, Takashi & Kawamura, Shoji & Ishida, Hajime. 2010. A genetic analysis of the Sakishima islanders reveals no relationship with Taiwan aborigines but shared ancestry with Ainu and main-island Japanese. *American Journal of Physical Anthropology* 142(2): 211–223. https://doi.org/10.1002/ajpa.21212.

松森晶子. 1998. 「琉球アクセントの歴史的形成過程：類別語彙 2 拍語の特異な合流の仕方を手がかりに」『言語研究』114: 85–114. https://doi.org/10.11435/gengo1939.1998.114_85.

松森晶子. 2000. 「琉球の多型アクセント体系についての一考察：琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方」『国語学』51(1): 93–108. https://db3.ninjal.ac.jp/SJL/view.php?h_id=2010931080.

Matsumori, Akiko. 2001. Historical tonology of Japanese dialects. In Kaji, Shigeki (ed.), *Cross-linguistic studies of tonal phenomena: Tonogenesis, Japanese accentology, and other topics*, 93–122. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

松森晶子. 2009. 「沖縄本島金武方言の体言のアクセント型とその系列：琉球調査用系列別語彙」『日本女子大学紀要：文学部』58: 97–122. http://id.nii.ac.jp/1133/00000859.

松森晶子. 2010. 「多良間島の 3 型アクセントと「系列類別語彙」」上野善道教授退職記念論集編集委員会（編）『日本語研究の 12 章』490–503. 東京：明治書院.

松本克己. 1975. 「古代日本語母音組織考：内的再建の試み」『金沢大学法文学部論集』22: 83–152. http://hdl.handle.net/2297/40913.

松本克己. 2007. 『世界言語のなかの日本語：日本語系統論の新たな地平』東京：三省堂.

宮城信勇. 2003. 『石垣方言辞典』全 2 巻. 那覇：沖縄タイムス.

Miyake, Marc Hideo. 2003. Philological evidence for *e and *o in Pre-Old Japanese. *Diachronica* 20(1): 83–137. https://doi.org/10.1075/dia.20.1.06miy.

中本謙. 2009. 「琉球方言 p 音は文献以前の姿か」『沖縄文化はどこから来たか：グスク時代という画期』191–225. 東京：森話社.

中本謙. 2011. 「p 音再考：琉球方言ハ行子音 p 音の素性」『日本語の研究』7(4): 1–14.

中本正智. 1990. 『日本列島の言語史の研究』東京：大修館.

中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）1982–1999. 『角川古語大辞典』全 5 巻. 東京：角川書店.

中西進（編）1978–1985. 『万葉集：全訳注原文付』全 5 巻. 東京：講談社.

仲宗根政善. 1983. 『沖縄今帰仁方言辞典』東京：角川書店.

Nettle, David. 1999. Is the rate of linguistic change constant? *Lingua* 108(2–3): 119–136. https://doi.org/10.1016/S0024-3841(98)00047-3.

Nevskij, Nikolai A. 1922–1928. 『宮古方言ノート』複写本 全 2 巻. 平良：沖縄県平良市教育委員会.

小川晋史. 2012. 『今帰仁方言の諸相』東京：ココ出版.

荻野千砂子. 2011. 「八重山地方の授受動詞タボールンと中世語「給はる」：敬意優先の授受動詞体系」『日本語の研究』7(4): 39–54. https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.7.4_39.

奥村三雄. 1990. 『方言国語史研究』東京：東京堂.

大野晋. 1977. 「音韻の変遷」大野晋・柴田武（編）岩波講座日本語第 5 巻. 『音韻』147–220. 東京：岩波書店.

大城健. 1972. 「語彙統計学（言語年代学）的方法による琉球方言の研究」服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員会（編）『現代言語学』533–558. 東京：三省堂.

Pellard, Thomas. 2008. Proto-Japonic *e and *o in Eastern Old Japanese. *Cahiers de Linguistique Asie Orientale* 37(2): 133–158. https://doi.org/10.1163/1960602808X00055. https://www.persee.fr/doc/clao_0153-3320_2008_num_37_2_1850.

Pellard, Thomas. 2009. *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. Paris: École des hautes études en sciences sociales. (Doctoral dissertation). https://tel.archives-ouvertes.fr/tel-00444150.

Pellard, Thomas. 2013a. 「日本列島の言語の多様性：琉球諸語を中心に」田窪行則（編）『琉球列島の言語と文化：その記録と継承』81–92. 東京：くろしお出版 https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01289782.

Pellard, Thomas. 2013b. Ryukyuan perspectives on the Proto-Japonic vowel system. In Frellesvig, Bjarke & Sells, Peter (eds.), *Japanese/Korean linguistics*, vol. 20, 81–96. Stanford: Center for the Study of Language and Information Publications. https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01289288.

Pellard, Thomas. 2015. The linguistic archeology of the Ryukyu Islands. In Heinrich, Patrick & Miyara, Shinsho & Shimoji, Michinori (eds.), *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*, 13–37. Berlin: De Gruyter

Mouton. https://doi.org/10.1515/9781614511151.13. https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01289257.

Pulleyblank, Edwin G. 1991. *Lexicon of reconstructed pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*. Vancouver: University of British Columbia Press.

崎村弘文. 2006. 『琉球方言と九州方言の韻律的研究』東京：明治書院.

Serafim, Leon A. 1994. *Linguistically, what is Ryukyuan? Synchronic and diachronic perspectives*. (Paper presented at *Second international symposium of the International Society for Ryukyuan Studies*, Harvard. 24 March 1994).

Serafim, Leon A. 2003. When and from where did the Japonic language enter the Ryukyus? ボビン アレキサンダー・長田俊樹（編）『日本語系統論の現在』*463–476*. 京都：国際日本文化研究センター https://doi.org/10.15055/00005292.

Serafim, Leon A. 2008. The uses of Ryukyuan in understanding Japanese language history. In Frellesvig, Bjarke & Whitman, John (eds.), *Proto-Japanese: Issues and prospects*, 79–99. Amsterdam: John Benjamins. https://doi.org/10.1075/cilt.294.07ser.

Shinoda, Ken-ichi & Doi, Naomi. 2008. Mitochondrial DNA analysis of human skeletal remains obtained from the old tomb of Suubaru: Genetic characteristics of the westernmost island Japan. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science*: *Series D, Anthropology* 34: 11–18. https://ci.nii.ac.jp/naid/110007342381.

Summerhayes, Glenn R. & Anderson, Atholl. 2009. An Austronesian presence in southern Japan: Early occupation in the Yaeyama Islands. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* 29: 76–91. http://hdl.handle.net/1885/51614.

Tajima, Atsushi & Hayami, Masanori & Tokunaga, Katsushi & Juji, Takeo & Matsuo, Masafumi & Marzuki, Sangkot & Omoto, Keiichi & Horai, Satoshi. 2004. Genetic origins of the Ainu inferred from combined DNA analyses of maternal and paternal lineages. *Journal of Human Genetics* 49: 187–193. https://doi.org/10.1007/s10038-004-0131-x.

高宮広土. 2005. 『島の先史学：パラダイスではなかった沖縄諸島の先史時代』那覇：ボーダーインク.

高梨修・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹. 2009. 『沖縄文化はどこから来たか：グスク時代という画期』東京：森話社.

Thorpe, Maner L. 1983. *Ryūkyūan language history*. Los Angeles: University of Southern California. (Doctoral dissertation). http://digitallibrary.usc.edu/cdm/ref/collection/p15799coll3/id/505374.

鳥越憲三郎. 1968. 『おもろさうし全釈』全 5 巻. 大阪：清文堂.

上村幸雄. 1977. 「琉球方言研究の現代の課題：とくにその比較歴史方言学的研究について」『新沖縄文学』35: 226–237.

上村幸雄. 1997. 「琉球列島の言語：総説」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『日本列島の言語』311–354. 東京：三省堂.

上村幸雄. 2010. 「危機言語としてのアイヌ語と琉球語：その日本語の形成・発展へのかかわり〈前編〉」『国文学：国文学解釈と鑑賞』75(1): 6–26.

Unger, J. Marshall. 2009. *The role of contact in the origins of the Japanese and Korean languages*. Honolulu: University of Hawai'i press.

Whitman, John. 1999. Personal pronoun shift in Japanese: A case study in lexical change and point of view. In Kamio, Akio & Takami, Ken-ichi (eds.), *Function and structure: In honor of Susumu Kuno*, 357–386. Amsterdam: John Benjamins. https://doi.org/10.1075/pbns.59.16whi.

柳田征司. 1993. 『室町時代語を通して見た日本語音韻史』東京：武蔵野書院.